

シンガポールのマレー人

田村慶子

2011年9月下旬から、シンガポール国立大学(NUS)客員研究員としてシンガポールに滞在している。大学院生時代にNUSをウロウロしていた頃と同じように、学内のいろいろなセミナーや講演会に顔を出している。もっとも当時は学科掲示板を見て回ったが、今はメールで案内が送られてくる。ただ、あまりにセミナーや講演の案内が多いので、メールをチェックするだけでも大変であるが。

10月19日と20日に、シンガポールのマレー人に関する興味深いセミナーが続けて開催された。19日はマレー研究学科主催「Analyzing the Portrayals and Narratives of the 1964 Racial Riot (1964年人種暴動の語りと記述を分析する)」、20日は政治学科主催「Singapore's 'Malay Plight' (マレー人の苦境)」だった。

シンガポールがマレーシア連邦の1州であった1964年に起こった2度の人種暴動は、シンガポールでは「人種間の憎しみや紛争は簡単に発生すること、ゆえに人種紛争が起こらないように常に監視すべきことを示す例」として語り継がれている。「シンガポールの正しい歴史」であるリー・クアンユー回顧録によれば、暴動はマレーシアUMNOがPAPに打撃を与えるべく事前に計画して起こしたものとされている。学校教科書でも同様の内容が教えられている。ただ、残念ながら、シンガポール政府の公文書はすべて閲覧禁止であるために、回顧録以外の見方は出てこない。

しかし、このセミナーの報告者(NUSマレー研究学科大学院生)では、当時のシンガポールの新聞、公文書館に保存されている関係者や暴動の被害者などの語りやインタビュー、オーストラリア公文書館の資料を参照しながら、暴動にはもう1つの見方があると述べた。それはオーストラリア公文書が示しているもので、暴動はかなり偶発的なものではあるが、暴動を引き起こすべくマレー人を挑発したのはインドネシア人で、暴動にはインドネシア政府もしくは何らかの機関が関わっている可能性が高いのではないかと、という見方である。

報告の後には、マレーシア政府の見方はどうなのか、インドネシアの資料はどうなっているのかという質問から、暴動を公に記憶するとはどういうことなのか、など多岐にわたる議論や意見交換がなされた。

「マレー人の苦境」は、シンガポールのマレー人社会に関する多くの論文や本の著者であるHussin Mutalib氏が報告者であった。2010年に国連人種差別特別調査委員会がシンガポールを8日間訪れて、「マレー人は、教育においても職場においても差別と困難に直面している。政府はこれらを是正するために特別な施策を講じるべきである」という強烈な内容の報告書をシンガポール政府に提出した。だが、シンガポール政府は直ちにこれを却下しただけでなく、マレー人がこの25年間にいかに進歩してきたかを示す具体的な数字を挙げて反論した。

Hussin Mutalib 氏は、この国連レポートの勧告を全面的に支持した上で、「シンガポール政府が何らかの対策を取らなければ、マレー人コミュニティの遅れはさらに深刻なものとなり、それはシンガポールの発展や国民統合だけでなく、近隣諸国との関係をも阻害するだろう」と述べたが、今後の展望は、政府のマレー人コミュニティへのきめ細かい奨励策が重要という少し消極的なものであった。質疑応答では、次々と政府批判が飛び出ただけでなく、マレーシアで採られているようクォータ制度の可能性や、華人のマレー人差別の問題などがフロアから出され、2011年5月選挙後の自由な言論空間の広がりを感じる事が出来た。

シンガポールのマレー人コミュニティは今後どのような方向に向かっていくのか。この国の自由な言論空間の広がりの中なかで、ますます議論が深まっていくに違いないし、このセミナーに華人やインド人の参加者も多かったことは、議論が多様な学生やスタッフに共有される可能性を示していよう。